

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1070800204		
法人名	有限会社 グループホーム 渋川		
事業所名	グループホーム 渋川の家		
所在地	群馬県 渋川市 金井125-4		
自己評価作成日	平成26年8月15日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人群馬社会福祉評価機構		
所在地	群馬県前橋市新前橋町13-12		
訪問調査日	平成26年9月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者の皆様一人一人の残存能力を尊重し、最大限に活かせるよう日々務めています。できることやしないこと、できないことを把握したり、「待つ」ことを大切にしながら、ご利用者がマイペースで生活できるようケアをしています。また防災訓練は自主的に毎月1回行っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念である「一日を明るく、仲良く、楽しく、地域の中で安心して人間らしく暮らす」の項目毎に具体例を提示し、日々の支援の中で理念に立ち返り実践に繋げている。「明るく、楽しく」の実践では、利用者が馴染みの蕎麦屋にこれまで通り通う、食べ慣れた好きな弁当を買いに行く等の個別支援に取り組み、「人間らしく」では、管理者が介護支援専門員を兼ねた4月以降、ケース会議で自由と安全・リスクと安全等について話し合いを重ね、職員の意識改革に取り組み、身体拘束をなくす努力を試みている。また、「地域の中で安心して暮らす」ため、事業所でのハーモニカ演奏には老人会の人達と楽しむ等交流を深め、さらに地域の人達も参加した避難訓練を実施している。その他、事業所として介護職員が働き易く・やりがいのある職場となるよう毎年4月に定期昇給を実施するなど士気を高める努力を行っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	2年前に外部評価の方の指導で「掘り下げ作業」や「掘り下げた事柄をどうやって実践していくか」をケース会議内で話し合い、玄関に掲げている。	理念「一人一人、明るく楽しく、仲良く」「地域の中で安心して人間らしく暮らせるホーム」の一つ一つを、日頃のケアの中でどのような行動をとることが実践になるのかケース会議で話し合いを重ね、言葉毎に具体例を提示した。具体化した行動を示したことで、職員は意識し、日々の振り返りとなっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年初めの「道祖神」、地域の「夏祭り」には毎年参加している。夏祭りには自治会長の計らいにより、日陰に席を設けて下さったりしている。	地区の「道祖神祭り」やふれあい公園で開催される「夏祭り納涼祭」に参加し流しそうめんなどをふるまわれるといった地元の人との交流を築いている。利用者は、散歩している人に「寄ってお茶を飲みませんか」と声をかけている。また、ハーモニカ演奏等のボランティアが訪問した際は、老人会の人達を招待し共に楽しんでいる	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議を通じて、認知症や介護保険について学ぶ機会を作っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	防災について、毎月行っている避難訓練を見学したり、地域ができることできないことを把握してもらい役割を考えてもらっている。	事業所の活動を知ってもらうため家族は順番に出席し、その他市職員、自治会の会長・副会長・衛生部長が出席し、毎回議題を設け隔月に開催している。意見交換では、退居者の補充が困難になっていることに関し、社会福祉協議会や民生委員との連携や情報発信について話し合われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	主に運営推進会議にて報告や相談をすることが多い。また困難事例を地域包括に相談するもすぐに高齢福祉課に回される	管理者は、困難事例や介護保険解釈でわからないことを、積極的に地域包括支援センターや高齢福祉課に確認している。また、行政から勉強会や介護保険制度についてメールで通知され、ある程度の情報交換を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関について、前回の外部評価での指導、消防署からの指導もあり玄関をサムターンに変更。夜間帯のみ2重ロックをしている また身体拘束について前ケアマネが身体拘束についてあまり理解をしていなかったため、廃止できず。いまはケアプランに防止を掲げ廃止する方向に向かっている	管理者が介護支援専門員を兼ねた4月以降、ケース会議で自由と安全等について話し合いを重ね、職員の意識改革に取り組み、ベッド柵と安全ベルトの使用を廃止し、玄関の鍵をサムターン式に変え見守り体制が整う月・水・金は鍵をかけない支援に取り組んでいる。	引き続き職員の意識改革に取り組み、日中は利用者をはじめ家族や近隣の人達が自由に出入りできるよう玄関に鍵を掛けないケアに取り組むよう期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入浴時やオムツ交換時など青アザが出来ていればヒヤリハットを書き情報を共有し虐待防止に努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用しようとしたが、市に断られたことがあった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に時間をとってもらい書面、口頭説明を行っている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	なかなか家族からの意見が上がらないため、家族が訪問時、こうして下さい等意見があったときは話を聴いた職員が「要望書」に記入、ケース会議にて検討し、検討した事柄を家族に伝えている。	入居者と月1回は会ってもらうため、他県に住む人や後見人を含め全ての家族に利用料を持参してもらい、その際に家族の要望を聞いている。家族の意見を聞き入れ、意識的に課題解決するため「要望書」に記入し、ケース会議で話し合い、その結果を家族に伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	主にケース会議で話されている。	毎月のケース会議で、利用者について話し合う他、業務体制など事業所の様々な内容の意見交換を活発に行っている。会議の日は事業所が夕食代と残業代を負担し、じっくり話し合えるように配慮している。また、職員は個別に管理者と話し合うこともあり、多様な意見を受け入れている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	3年程前より定期昇給を毎年4月に実施。ボーナスは夏、冬年2回基本給の一ヶ月を保証している。有給についてなるべく取れるよう指導している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ケース会議にて施設勉強会を開いている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に加わり、メールなどのチェックを行っている。また職員の交換研修を行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	インテークで得た情報で暫定的なケアプランを作成し、1ヶ月後さらにアセスメントしケアプランを建て直しをしている。また現場で困りごとがある場合はご家族とも相談をしている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを開始するまえに必ず、本人の自宅や入院している病院へ赴き、本人と家族の要望を必ず聞いている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学に訪れる方には介護保険の存在自体知らない方もいる。介護保険の手続きや介護度によって使えるサービス、家族の意向などを聴き居宅、施設サービスを簡単ではあるが説明をしている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	挨拶やお礼を大切に、共同作業や昼食を職員も一緒に食事をしている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	月1回は利用者に面会して欲しいと、利用料を現金で支払うようにしている。そうすることにより、どの家族でも月1回は面会できるシステムをとっている。しかし中には逢いたくもない、顔も見たくないという家族もいて対応に困っている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者の友人が訪ねてきた時はいつでも来れるように説明はしている。また家族と利用者が電話で話すことも支援している。20年間蕎麦屋に通いつづけた利用者がいて、蕎麦屋まで外食に行った。	入居前は週3日程食べに行き、行かなければ自宅に電話を入れる蕎麦屋には、入居後も月一度職員と食べに行けるよう支援している。また、家族の協力を得て外食したり、馴染みの店で買い物や外食をしたりするなど、馴染みの場所との継続支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	「ほらエプロンを外して」などの声かけや、水分介助をする利用者もいる。また編み物を通して、会話が始まることもある		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院して退去した利用者様についても、ご家族やご本人に面会をしたりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者様、職員が互いに話を聴きやすい人を知っている。本人の希望があればケース会議にて話し合っている。できるかぎり職員本位にならないよう気をつけている。	意思表示のできる人達は、行きたい店や以前から食べ親しむものを買に行く等の個別支援に取り組んでいる。意思表示の難しい人達には、喜怒哀楽の表情を同じ目線で捉え、利用者が望むケアを推測し、その人にとって最も良いと思われるケアの提供に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	就寝時間や起床時間、食事時間など限られた範囲ではあるが、これまでの暮らしのペースに合わせるよう努力している		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者の気づきや嗜好品など気づいたことがあれば会議内にて検討し情報の共有に努めている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族の要望を聞きつつケース会議内にて職員と話し合いケアプランを作成している	管理者が中心となり、本人・家族の要望聴取の後、アセスメント・計画作成を行い、職員も内容確認、補足して計画を作り上げている。評価は1ヶ月に一度は行い、短期目標は3ヶ月、長期目標は6ヶ月に一度見直している。新しくなった介護計画は共有するため見やすい位置に置いているが、日々の個別記録は計画を反映した記述になっていない。	介護計画に沿った日々のケアが個別記録に記入され、介護計画を中心とした連動したケアがなされることを期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	特別なことがあれば申し送りノートを活用したり業務日誌にて申し送りをしている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	たばこの喫煙や外食など支援に取り組んでいる。水上にあるお墓参りをしたいと利用者様より話があったが、家族の希望が添わず行く事ができなかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアの方から、毎月絵手紙を送ってくださる。四季折々の絵手紙をお茶の時間に読んでいます。利用者にも季節を感じられている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	井口医院と提携をしている。また家族が望めばその限りではない	かかりつけ医の受診は家族対応が基本であるが、病状により職員も付き添い、家庭状況から対応困難な場合は職員が同行している。職員が対応した時の受診状況等は利用料を持参した時に伝え、緊急時はその都度伝えている。訪問看護師が週1回全利用者の健康管理にあっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回虹訪問看護ステーションと契約し往診してもらっている。そのときに相談するようにしている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院生活がスムーズに送れる様、サマリーを提供している		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ホーム側、家族、訪問看護の3者会議を開くようにしている。ホームでできることやできないことを家族に把握してもらい、適時家族に報告、訪問介護に連絡が取れるよう環境整備を整えている	「重度化・終末期ケア対応方針」に基づき、出来ること、出来ないことを家族に説明している。重度化の段階に応じ家族と話し合い、医師や訪問看護師、家族の協力を得て、看取りを行っている。職員の勉強会では、「家族から感謝される最期の支援」を心がけるよう話し合い、職員員の精神面のフォローも管理者は見極め看取りを行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時にどこへ搬送するか、また夜間の急変時の対応をマニュアル化している。また定期的に会議内にて確認している		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の水と食料をある程度確保をしている	消防署の指導を受け、地元の人達も参加・避難者を見守りし、年2回の総合訓練を行っている。夜間を想定し、自主避難訓練を毎月行い、反省会では寝たきりの人の避難方法が話し合われ、5分以内に避難場所に避難している。また、自治会3役に自動的に連絡がいく火災時の体制が整備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	以前、外部評価の課題として勉強会を開いた	トイレ誘導は、そっと行い扉を閉めて行っている。「ちょっと待って」を禁じ、入室の際はノックし、声かけを行っている。知的障害がある利用者の発言も、その方の中にある大切な部分(プライド)を探りつつ会話し、一方的にならないよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	塗り絵をするときに、塗りたい絵を決めてもらったり、食事時に調味料の選択をしてもらっている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	昼夜逆転しない程度に夜間起きてもらったり、朝遅く起きたりとできる範囲ではあるが、希望にそって支援している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	アクセサリなど身につけている利用者様がいる。たまにそのことでトラブルを起こす事もある		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	下膳をしてもらったり、お皿を拭いたり、昼食だけではあるが、一緒に食事をしている	食材業者が作成した献立を基に職員が調理し、職員も同じ食事を食べている。月1回「お楽しみ昼食会」の開催、誕生会では好みの料理を提供、ベランダでの流しそうめんやバーベキュー・お茶会の開催、花見を兼ねた外食や家族との外食などを楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	おかわりをしたい利用者様にはおかわりを提供している。また水分摂取できるよう、時にはジュースや果物を提供している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、全員口腔ケアを実施している。コップと歯ブラシを紛失しやすい、または隠してしまう利用者には、職員側でコップ等預かっている。口腔ケアができない利用者様には口腔ケア用ウェットティッシュを利用している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりに合わせて定時にトイレ誘導したり随時介助をしている	排泄が自立している利用者には、トイレ使用が円滑にいくよう「便所」「トイレ」と併記し、混乱しないようにしている。オムツ使用者には、日中2人介助でトイレでの排泄を促している。時に放尿する利用者には、ポータブルトイレの使用で居室から出て来ず、わからないうちに不潔になってしまうことも懸念されるため、職員で話し合い、適時の声かけでトイレ誘導を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	オリゴ糖の活用や乳製品など利用している		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	一番風呂に入りたい利用者様やタイミングがずれると入らない利用者など配慮している。また透析を行っている利用者は曜日が大体決まってしまう	毎日入浴できる準備をしているが、利用者の希望を聞きながら週3回から2回入浴している。温泉の暖簾を掲げ「渋川温泉に入りましょう」と誘い、一番風呂にしか入らない人には「一番風呂に入りましょう」と誘っている。ゆず湯や菖蒲での香りを楽しみ、季節を感じてもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ホールは夜9時に消灯だが、必ず寝なければならぬというわけではない。テレビを見たり職員と会話したりしている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬防止のため、2重チェックしている。また利用者により飲み方などもあるため情報共有している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できるかぎりではあるが、嗜好品や趣味、外出、喫煙など行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家族に相談しながら、自宅へ一時帰宅している利用者様がいる。馴染みのスーパーで買い物をしたりしている	個別支援で、月1回馴染みの食堂に出かけたり、食べ慣れて気に入っている弁当を買いに行ったりしている。出来るだけ外気に触れるよう、ベランダでの流しそうめんやバーベキュー・お茶会を開き、花見を兼ねた外食や家族との外食を楽しめるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	事務所で金銭は管理している。また利用者から望めば検討するようにしている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が電話をかけられない場合は電話をかける支援を行っている。またボランティアの方に返事を出したりしている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	トイレがわからない利用者があるのでトイレがわかるよう入り口にトイレを表示している。また季節で使用する壁紙など製作し展示している	毎年干支のはり絵を制作し、居間や廊下の壁に飾っている。気の合う人同士がテーブルを囲み、大きな水槽に金魚が泳ぎ、民家を改造した家庭的な雰囲気なかで利用者は日々過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	できるかぎりホールでも独りになれるようにはしているが、独りになりたいときは居室へ誘導するようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドの位置など利用者の要望に応じている。入居するときに使い慣れたものなど活かすよう説明はしている	身体状況により、3種類のベッドを事業所が用意している。自宅から仏壇や整理ダンス・テレビが持ち込まれている。自分で作った人形を飾り、好きな犬の絵をたくさん壁に貼るなど、それぞれの人が居心地良く過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒が予測される利用者様にはベッドで臥床時、床にはマットレスを使用したり、布団を持ち運びしてしまう利用者様には布団を置けるスペースを作り防止に努めている		